

## ⑫ 実用新案公報 (Y 2)

平4-51647

⑬ Int. Cl. °

A 47 G 29/126

識別記号

庁内整理番号

7137-3K

⑭ 公告

平成4年(1992)12月4日

(全3頁)

⑮ 考案の名称 郵便受箱

⑯ 実 願 昭61-96943

⑰ 公 開 昭63-3282

⑱ 出 願 昭61(1986)6月25日

⑲ 昭63(1988)1月11日

⑳ 考 案 者 芝 野 裕 司 大阪府門真市大字門真1048番地 松下電工株式会社内

㉑ 出 願 人 松下電工株式会社 大阪府門真市大字門真1048番地

㉒ 代 理 人 弁理士 石田 長七

㉓ 審 査 官 扇 野 博 明

㉔ 参 考 文 献 実開 昭54-128853 (J P, U) 実公 昭37-13403 (J P, Y 1)

## 1

## ㉕ 実用新案登録請求の範囲

前面が開口部となつた箱体の開口部に扉を開閉自在に設け、この扉を施錠する錠を設け、扉の上部に郵便物のように厚みの薄い投函物を投入する上下幅の狭い上投入口を設け、扉の下部に厚みの厚い投函物を投入するための上下幅の広い下投入口を設け、扉の背部の上投入口と下投入口との間から背方に向かつて突出先端が下に位置する中仕切り板を扉に設けて成る郵便受箱。

## 考案の詳細な説明

## 〔技術分野〕

本考案は、一つの郵便受箱に郵便物のように厚みの薄いものと、それ以外の厚みの比較的厚いものとを収納し、尚且つ郵便物が盗難にあわないようにした郵便受箱に関するものである。

## 〔背景技術〕

従来集合住宅やビル等においては、共働き家庭が増加し、また単身者用マンションが増えたことにより昼間不在のところが多いという理由により、洗濯の出来上がったもの、小包みやその他の配達物は管理人が受け取ったり、郵便受箱とは別に収納箱や収納棚を設けていた。また郵便物とこれら収納箱とを一体化することも考えられるが、洗濯物や宅配物は投入口の縦幅が広いことが要求され、投入口の外側から投入口に手首がすつぽりと入り、内部の郵便物やその他の投函物が盗難にあうという問題があつた。特に郵便物の盗難はプ

## 2

ライバシーの保護という面から大きな問題であつた。

## 〔考案の目的〕

本考案は、上記の点に鑑みて考案したものであつて、その目的とするところは、上下の開口幅が異なる2種の投入口を設け、幅の狭い方の投入口から投入された郵便物は外部から盗難できないようにし、しかし同一の郵便受箱に幅の大きな他の投函物を投函できる上に、投函物の取り出しを容易に行えるようにした郵便受箱を提供するにある。

## 〔考案の開示〕

本考案の郵便受箱は、前面が開口部1となつた箱体2の開口部1に扉3を開閉自在に設け、この扉3を施錠する錠4を設け、扉3の上部に郵便物のように厚みの薄い投函物を投入する上下幅の狭い上投入口5を設け、扉3の下部に厚みの厚い投函物を投入するための上下幅の広い下部投入口6を設け、扉3の背部の上投入口5と下投入口6との間から背方に向かつて突出先端が下に位置する中仕切り板7を扉3に設けて成るものであつて、このような構成を採用することで、上記した本考案の目的を達成したものである。すなわち本考案にあつては、上下幅の狭い上投入口5から郵便物を投入することで、突出先端が下方を向いた中仕切り板7にガイドされて郵便物を箱体2の奥に入れることとができ、また上下幅の狭い上投入口5

から手首を入れて郵便物を盗むことができないものであり、さらに下部の上下幅の広い下投入口 6 からは郵便物よりも肉厚の厚い物の投函ができ、また下投入口 6 から手首を入れても仕切り板 7 に邪魔されて奥に投入された郵便物が盗まれないようにしたものであり、また扉 3 を開けば中仕切り板 7 に邪魔されることなく投函物を取り出せるようにしたものである。

以下本考案を実施例により詳述する。箱体 2 は前面が開口部 1 となっており、この箱体 2 の開口部 1 に扉 3 が枢支部 8 部分で枢支してあつて、扉 3 を開閉することができるようになっている。扉 3 には扉 3 を施錠するための錠 4 が設けてある。また扉 3 の上部に郵便物のように厚みの薄い投函物を投入する上下幅の狭い上投入口 5 が設けてある。この上投入口 5 は通常の郵便受箱の投入口と同様に手首を奥まで入れることができないような程度の上下幅となつている。また扉 3 の下部に厚みの厚い投函物を投入するための上投入口 5 よりも上下幅の広い下部投入口 6 を設けてある。また扉 3 の背部の上投入口 5 と下投入口 6 との間から背方に向かつて先端程下り傾斜し且つ突出先端が下に向けて突出して先端突出部 9 となつた中仕切り板 7 を設けてある。しかして、上記のような構成の郵便受箱は通常時には錠 4 をロックしておくものである。そして郵便物は上投入口 5 から箱体 2 内に投入するものであり、投入された郵便物の内長さの長いものは第 1 図のように郵便物の一端が中仕切り板 7 の上に乗り上げる。このことによりこの後、下投入口 6 より厚みの厚い投函物を入れる際、先に入っていた郵便物がその厚みの厚い投函物の投函を妨げることがなく、また上下幅の広い下投入口 6 から手を入れて郵便物を盗もうとしても中仕切り板 7 が邪魔になつて盗むことが不可能となる。また長さの短い郵便物の場合、この中仕切り板 7 を滑つて箱体 2 の奥に収納されるため、同じく下投入口 6 から手を入れても先端が下方に向いた中仕切り板 7 が邪魔になり取り出しに

くくなるものである。一方箱体 1 内の郵便物やその他の投函物を取り出す場合には錠 4 のロックを解除して第 5 図に示すように扉 3 をあけて内部の郵便物やその他の投函物を箱体 2 から取り出すのである。この場合、扉 3 をあけると中仕切り板 7 が扉 3 とともに回動して外に出て箱体 2 の開口部 1 が全面にわたつて開くこととなり、中仕切り板 7 に邪魔されることなく内部のものを取り出せるのである。

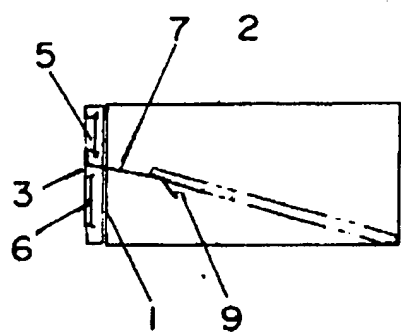
#### 〔考案の効果〕

本考案にあつては、叙述のように箱体の開口部に扉を開閉自在に設け、この扉を施錠する錠を設け、扉の上部に郵便物のように厚みの薄い投函物を投入する上下幅の狭い上投入口を設け、扉の下部に厚みの厚い投函物を投入するための上下幅の広い下部投入口を設け、扉の背部の上投入口と下投入口との間から背方に向かつて突出先端が下に位置する中仕切り板を設けてあるので、突出先端が下方を向いた中仕切り板にガイドされて郵便物を箱体の奥に入れることができ、また上投入口は上下幅が狭いのでここから手首を入れて郵便物を盗むことができず、さらに下部の上下幅の広い下投入口からは郵便物よりも肉厚の厚い物の投函ができ、また下投入口から手首を入れても突出先端が下方を向いた仕切板に邪魔されて奥に投入された郵便物が盗まれないものであり、しかも中仕切り板は扉に設けてあるために、扉を開く時には中仕切り板が扉と一体的に開閉移動することから、中仕切り板が邪魔になることなく、投函されたものをまとめて楽に取り出すことができるものである。

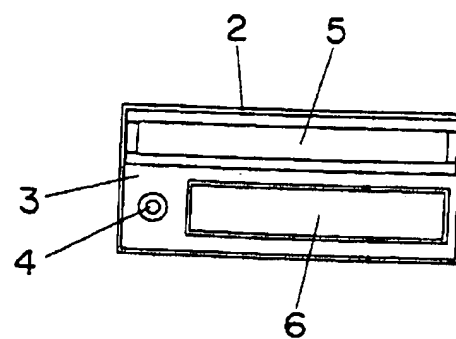
#### 図面の簡単な説明

第 1 図は本考案の縦断面図、第 2 図は同上の正面図、第 3 図は同上の一部省略水平断面図、第 4 図は同上の分解斜視図、第 5 図は同上の扉をあけた状態の斜視図であつて、1 は開口部、2 は箱体、3 は扉、4 は錠、5 は上投入口、6 は下投入口、7 は中仕切り板である。

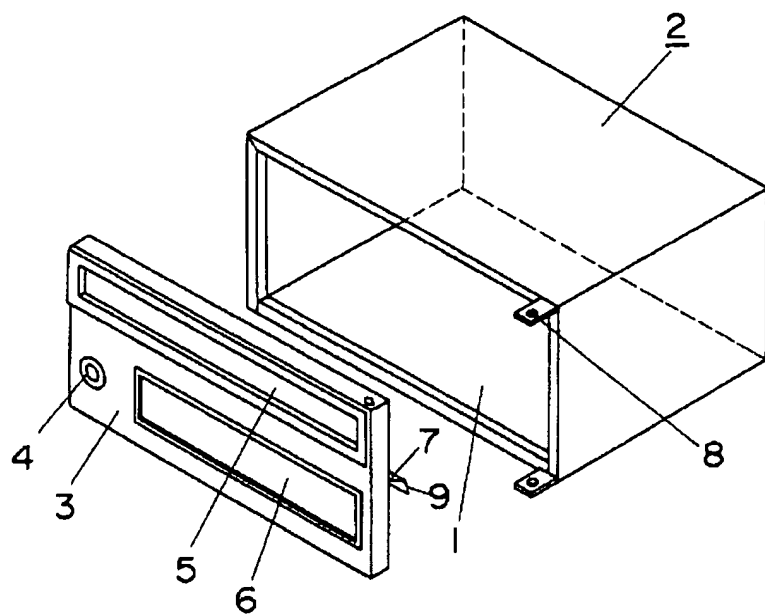
第1図



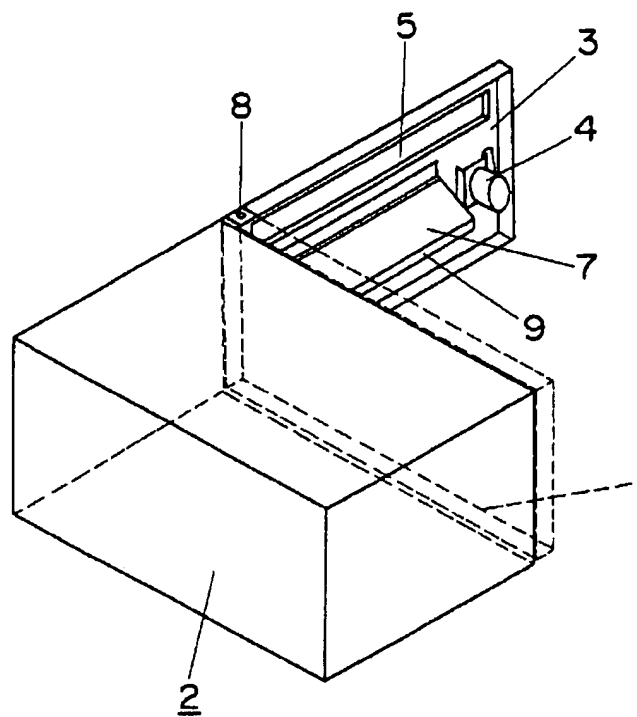
第2図



第4図



第5図



第3図

